

SDGsの視点からの学習活動研究部会 研究活動記録

# 中間報告書 研究編

## 高等学校

一般財団法人栃木県連合教育会

令和6年9月

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【高等学校】

#### 高等学校

##### 1 高等学校における SDGs を取り入れた学習活動とは

本研究では、高等学校における SDGs を取り入れた学習活動とは何か、その意義と方法について考察する。SDGs とは、2030 年までに持続可能な社会を実現するために国連が採択した 17 の目標と 169 のターゲットである。社会の創り手となる高校生が、SDGs の視点を持って学ぶことが重要である。しかし、現状では、高校教育において SDGs の視点が十分に受け入れられていないという課題がある。本報告書では、栃木県内の高等学校に対して行ったアンケート結果を基に、その原因と解決策を探る。

高等学校における SDGs を取り入れた学習活動とは、単に目標やターゲットを知ることではない。それよりも重要なことは、持続可能な社会の創り手として自ら考えて行動できるようになることである。そのためには、「持続可能な開発のための教育 (ESD)」という考え方が参考になる。ESD とは「地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて自ら行動を起こす力を身に付けるための教育」(文部科学省・日本ユネスコ国内委員会 2021) と定義されており、持続可能な社会の作り手としての資質・能力を育成するための教育である。

新学習指導要領では、幼稚園・小中学校と同様に、前文にて「これからの学校には、(中略) 一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と述べられている。総則では、「(前略) 豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される生徒に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体及び各教科・科目等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。」と述べられている。このように学校教育において SDGs の視点を取り入れることは国を挙げて取り組まれている。しかし、新学習指導要領では、具体的にどのように SDGs の視点を取り入れるかは示されておらず、学校が自主的に工夫する必要がある。

日本は、世界でも有数の先進国でありながら、SDGs 達成度ランキング(「Sustainable Development Report2023」, 持続可能な開発ソリューションネットワーク 2023)では 23 位という低い順位にある。特に、「ジェンダー平等」「産業と技術革新の基盤」「気候変動への対策」などの目標で遅れを取っている。また、日本の高校生は、他国の高校生に比べて、自分の意見を述べたり、議論したりする機会が少なく、主体性や批判的思考力が不足しているという指摘がある。これらのことから、日本の高校教育においては、SDGs の視点を取り入れることが急務であると言える。

SDGs の視点を取り入れた学習活動は、教科横断的に行う必要がある。しかし、現在の高校教育では、教科ごとに分かれた指導が主流であり、週 1 単位の総合的な探究の時間だけでは十分に活動時間を確保できないことが多い。

多くの高校の一つの目標である大学入試でも、改革により、学力の三要素を多面的・総合的に評価する「総合型選抜」が重視されるようになってきている。SDGs の視点を取り入れた学習活動は高校生の確かな学力の三要素を涵養する上でも効果的である。そういった学習活動を展開するためには、高校生に自ら課題を見つけさせたり、解決策を考えさせたりすることが必要となる。しかし、校務の多忙を極めることが指摘される中で、これまでの高校教育と大きく異なる、高校生の主体性や創造性を育む指導に対する負担感が強いことも課題である。

谷田川ら(2022)の調査によると高等学校における ESD の実施状況は、積極的に取り組んでいる学校は 5.5%にとどまっており、一方で「まったく取り組んでいない」学校は 23.8%と全体の 4 分の 1 近くとなっていることから、日本の学校教育における ESD の浸透状況はまだ十分とはいえない状況である。谷田川らはその要因として、高等学校においては、進学校の場合、ESD を取り入れることよりも、受験対策のための教科教育が優先されがちであることを指摘している。

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【高等学校】

地球規模の気候変動や、貧困や格差拡大といった社会問題など、持続可能性を脅かす課題は山積している。高校教育にも多くの課題が残されているが、これからの社会を支える子どもたちに対して、持続可能な社会の創り手としての教育を行うことは、必要不可欠である。その際、SDGs を取り入れた学習活動の普及が重要になると考えられる。

本部会では、SDGs を取り入れた学習活動を通して、①地球的課題に対して関心を高め知識を身につけ、②持続可能な社会の創り手として主体的に行動する力を養うことを目指していきたい。その際、学習活動としては、学校や教員の現状を踏まえ、ニーズに合わせた学習活動を提案していきたい。

#### 2 アンケート結果から見える高等学校の課題

今回のアンケート調査によって、高等学校のSDGsを取り入れた学習活動の実態を把握した。

全体的にはSDGsを取り入れた学習活動の実施に係る厳しい実態が明らかとなった。各高等学校の代表者に対して行ったアンケートでは、回答のあった29校のうち13校でSDGsに関する指導について「位置づけはない」という回答であった。位置づけのある16校のうち12校で、SDGsを取り入れた学習活動は、総合的な探究の時間に位置づけられていた。SDGsに関する内容を扱う場合に困難な点としては「進度等の都合で扱う余裕がない」が最も多く、次に「どう扱えばいいかわからない」が挙げられた。SDGsに関連する教育活動もほとんどが総合的な探究の時間に限定されており、生徒が日常的にSDGsに関わる機会は限られていることが明らかとなった。学校としてSDGsに関わる指導や校務分掌上での教員の位置づけもほとんどされていない。また、学校内でSDGsに関連する役割にあたっている教員は全体の20%に留まっている。

教員に対して行ったアンケートでは、105件の回答が得られた。そのうち「SDGsを取り入れた授業や活動を行ったことがある」と答えた回答は41件で、全体の約39%であった。内容としては、総合的な探究の時間での活動が多く、それ以外の授業では調べ学習や発表を取り組む例も見られた。その他、地歴公民の授業で内容に触れたというものもあった。SDGsを授業と関連付けて扱う頻度としては「あまりない」が最も多く51%を占め、次に「年に数回程度」が34%、「月に一度程度」が13%、「週に一度程度」という回答は105件中1件であった。SDGsを授業以外で扱う頻度は、授業より「あまりない」という回答が59%に増加した。

このような結果から高等学校の課題として、SDGsを取り入れた学習活動は実践の機会が非常に少なく、実践している場合でも総合的な探究の時間に限られることが学習活動の普及の障壁となることがわかった。その一方で、SDGsに関する内容を扱って良かった点として、SDGsに対する意識が高まったという回答が多く、SDGsを扱うことが少なからず生徒の意識に変化をもたらすことも明らかとなった。

#### 3 教育課題とSDGsの関連

これらの課題の生徒への影響を考えたい。アンケートの結果では、SDGsの目標について全項目において「知っている」と回答した生徒が多い。また、教員と生徒のアンケートを比較すると、「働きがいも経済成長も」、「産業と技術革新の基盤をつくろう」の認知度は生徒教員ともに全体と比較し、認知度は低い。また、さまざまなメディアで取り上げられる機会の多い、「気候変動に具体的な対策を」という項目について、生徒教員ともに「知っている」という回答は50%程度に留まった。SDGsに関連した用語の認知度を見ると、「地球温暖化」や「3R」、「バリアフリー」、「フードロス」など、ニュース等でも取り上げられる機会が多い用語について理解度が高い。その一方で、「カーボンニュートラル」や「フードマイレージ」、「識字率」など専門的な用語についての理解度は低い傾向がみられた。

「日本のSDGsの取り組みは世界の中で進んでいると思うか」という問いに対しては、教員の方が生徒より「遅れている」と考える割合が高かった。また、「SDGsに取り組むことで、地球の未来

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【高等学校】

がよくなる」と考える割合は教員、生徒ともに大きな違いは見られなかったが、生徒の方が「とてもよくなる」と考えるものの割合が高くなった。

SDGs の各目標について、理解度の自己評価（4段階）を点数化したものを、「今の地球の住みやすさ」、「未来の地球の住みやすさ」の5段階の評価や「日本のSDGsの取組みは、世界の中で進んでいると思うか」、「SDGsに取り組むことで、地球の未来はどう変わると思うか」に対する回答、「SDGsの目標の中で、将来特に関わっていきたいと思う目標」を3つまで選択したものの相関関係を調べた。理解度と今の地球の住みやすさの評価では、理解度の高低によって、現状評価はほとんど変わらないことが読み取れる（表1・図1）。理解度と未来の地球の住みやすさの評価では、理解度が高い自己評価になるほど、未来に悲観的な見方が増えることがわかった（表2・図2）。理解度と日本のSDGsの取組みの評価では、理解度が高い自己評価になるほど、日本の取組みへの評価が低くなる傾向が見える（表3・図3）。理解度とSDGsに取り組むことでの地球の未来への期待度では、理解度が高い自己評価になるほど、未来への悲観的な見方とは逆に、ポジティブな評価に変わる（表4・図4）。よって、SDGsに対する理解を深められるような教育によって、未来への希望が持てるようになるのではないかと考えられる。理解度と将来の進路との関連では、理解度の自己評価が高い分野の希望割合も高くなっており、理解度が上がるごとに、希望する分野を多く答えている（表5）。

表1 理解度と今の地球の住みやすさの評価

	住みやすい ← → 住みにくい					Average	%
	5	4	3	2	1		
≤1	1.1	1.1	2.7	0.7	0.3	3.35	5.8
1<, ≤2	1.1	2.8	3.2	0.5	0.1	3.57	7.6
2<, ≤3	5.1	10.2	15.7	2.6	0.6	3.48	34.1
3<, ≤4	3.4	8.2	9.6	2.7	0.2	3.49	24.2
4<	5.7	7.6	11.3	2.4	1.3	3.49	28.3

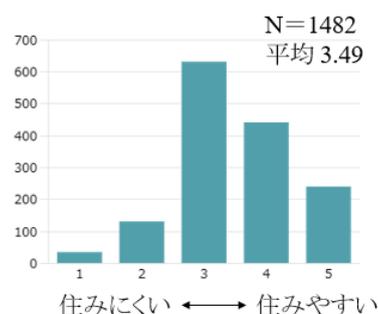


図1 理解度と今の地球の住みやすさの評価

表2 理解度と未来の地球の住みやすさの評価

	住みやすい ← → 住みにくい					Average	%
	5	4	3	2	1		
≤1	0.9	1.3	1.6	1.3	0.7	3.07	5.8
1<, ≤2	1.4	2.2	2.1	0.9	0.9	3.29	7.6
2<, ≤3	4.1	7.4	11.2	8.7	2.7	3.05	34.1
3<, ≤4	2.3	5.6	6.5	7.3	2.5	2.91	24.2
4<	3.8	5.2	7.8	7.5	4.0	2.90	28.3

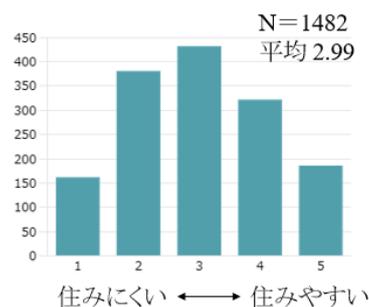


図2 理解度と未来の地球の住みやすさの評価

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【高等学校】

表3 理解度と日本のSDGsの取り組みの評価

	5	3	1	Average	X	%
≤1	1.0	2.6	1.1	2.94	1.0	4.8
1<, ≤2	1.5	3.5	1.3	3.06	1.3	6.3
2<, ≤3	5.5	14.2	8.1	2.81	6.3	27.8
3<, ≤4	3.9	10.9	6.6	2.75	2.8	21.4
4<	4.9	12.7	8.4	2.73	2.4	25.9

5 進んでいると思う  
3 どちらとも言えない  
1 遅れていると思う  
X わからない

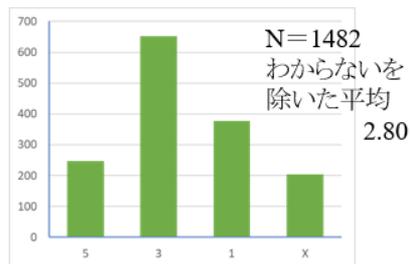


図3 理解度と日本のSDGsの取り組みの評価

表4 理解度とSDGsに取り組むことでの地球の未来への期待度

	5	4	3	2	1	Average	X	%
≤1	1.8	2.6	1.3	0.1	0.1	4.02	1.0	5.8
1<, ≤2	2.5	4.5	0.6	0.1	0.0	4.23	1.3	7.6
2<, ≤3	12.3	19.0	2.5	0.3	0.0	4.27	6.3	34.1
3<, ≤4	10.1	12.2	1.5	0.3	0.0	4.33	2.8	24.2
4<	13.4	12.4	2.0	0.5	0.1	4.36	2.4	28.3

5 とてもよくなると思う  
4 少し良くなると思う  
3 変わらない  
2 やや悪くなると思う  
1 とても悪くなると思う  
X わからない

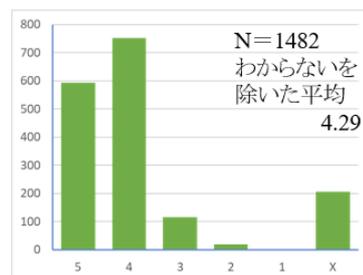


図4 理解度とSDGsに取り組むことでの地球の未来への期待度

表5 理解度と将来特に関わっていきたいと思う目標

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
%	貧困	飢餓	健康福祉	教育	ジェンダー	水とトイレ	エネルギー	経済成長	産業技術	人や国の不平等	まちづくり	作る使う責任	気候変動	海の豊かさ	陸の豊かさ	平和公正	パートナーシップ	一人あたりの回答数
≤1	25.6	26.7	19.8	15.1	25.6	18.6	2.3	10.5	4.7	14.0	19.8	5.8	9.3	14.0	9.3	20.9	5.8	2.48
1<, ≤2	25.7	23.0	27.4	10.6	15.9	15.0	7.1	16.8	3.5	18.6	24.8	8.0	8.8	16.8	8.8	21.2	6.2	2.58
2<, ≤3	23.7	20.9	23.7	14.0	28.9	14.2	7.3	16.0	3.8	21.7	19.8	11.1	7.5	15.4	8.9	23.7	3.8	2.64
3<, ≤4	22.1	20.4	22.9	19.0	33.2	11.2	7.3	14.2	5.3	22.1	18.2	11.5	11.2	16.5	8.7	20.7	4.7	2.69
4<	25.3	23.9	27.0	14.3	30.1	12.2	9.1	14.3	5.0	19.6	17.4	10.3	11.0	16.2	9.8	21.7	6.2	2.73
全平均	<b>24.0</b>	<b>22.1</b>	<b>24.5</b>	15.1	<b>29.1</b>	13.2	7.5	14.8	4.5	20.5	19.1	10.4	9.6	15.9	9.1	<b>22.1</b>	5.0	<b>2.67</b>
自己評価	3.6	3.6	3.2	3.5	3.7	3.4	3.1	2.8	2.7	3.5	3.1	3.1	3.2	3.5	3.3	3.3	2.9	

### 4 これからの高等学校におけるSDGsを取り入れた学習活動

栃木県における高等学校でのSDGsを取り入れた学習活動に関しては、学校での積極的な取り組みは普及しておらず、そのため生徒の持続可能な社会の作り手としての資質・能力が十分に育成されていない厳しい現状が明らかとなった。まずは、総合的な探究の時間でのSDGsと関連した学習活動を広めることが必要となる。その際、学校として総合的な探究の時間や教科横断的な学習の充実を図るための担当を割り当てることや、校内研修を通して教員のSDGsに対する理解度を高めること、指導法の確実な定着を図ることが重要である。また、生徒がSDGsをより自分事として捉え

### 3 校種毎の調査結果に基づいた考察【高等学校】

させるため、組織として SDGs を取り入れた学習活動を取り入れる方法として、キャリア教育と関連付けることも有用であると考え。その際、すでに全国の複数の学校において試行的な取り組みがなされている。本部会でも、そのような取り組みを実践し、その効果を検証することで県内の学習活動の充実に寄与していきたい。